

夕霧の恋の周辺にて

謹厳実直な人物として世に重じられて来た夕霧が、近頃、柏木の未亡人落葉の宮に通じているという噂が、遂に父源氏の耳にも達した。

(注1)
六条の院にも聞こしめして、いとおとなしうよろづを思ひしづめ、人のそしりどころなく、めやすくて過ぐしたまふを、おもだたしう、わがいにしへ、すこしあざればみ、あだなる名を取りたままし面起こしに、うれしうおぼしわたるを、いとほしう、いづかたにも心苦しきことのあるべきこと、さし離れたる仲らひにてだにあらで、大臣なども、いかに思ひたまはむ、さばかりのことたどらぬにはあらじ、宿世といふもの、のがれわびぬることなり、ともかくも口入るべきことならず、とおぼす。女のためのみこそ、いづかたにもいとほしけれと、あいなく聞こしめし嘆く。……(a)

業の上にも、来し方行く先のことおぼし出でつつ、かうやうの例を聞くにつけても、亡からむのち、うしろめたう思ひきこ

久保重

ゆるさまをのたまへば、御顔うち赤めて、心憂く、さまで後らかしたまふべきにや、とおぼしたり。女ばかり、身をもてなすさまも所狭う、あはれなるべきものはなし、ものあはれ、をりをかききことをも、見知らぬさまに引き入り沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはええしきも、常なき世のつれづれをもなぐさむべきぞは、おほかたものの心を知らず、いふかひなきものにならひたらむも、生ほしたてけむ親も、いとくちをしかるべきものにはあらずや、心にのみ籠めて、無言太子とか、小法師ばらの悲しきことにする昔のたとひのやうに、あしきことよきことを思ひ知りながら埋もれなむも、いふかひなし、わが心ながらも、よきほどにはいかで保つべきぞ、とおぼしめぐらすも、今はただ女一の宮の御ためなり。(夕霧) ……(b)

右の本文(b)の「女ばかり」以下「保つべきぞ」までについ

て、鈴木朗は「紫の上の御ころを述べたる、やがてこの作者の心と見るべし」(「玉の小櫛補遺」)と注している。恐らく、この部分も、紫の上の心語としては、異常に長く、異常に激しいのを、自分にも読者にも納得させようとした解釈であろう。しかし、作者が自分の感懐を生のかたちで、作中人物の紫の上に代弁させているとか、乃至は、紫の上の心に自分の心を重ね合わせて表白していると解するよりも、慎み深い女主人公に、常と異った激しい心語を発せしめているところに、作者の意図を汲むのが本筋であろう。われわれは紫の上が何故、このような激しい昂ぶりを見せるのかを考えて見る必要がある。次いでまた、紫の上の心語を含むこの一場面(b)が、物語の進行の中でどういう意味を持つのかを考えたい。さらにそれに関連して、源氏物語第二部において夕霧の巻の果たす役割についても考えてみたいと思う。

○

先ず、紫の上の心語を誘発した源氏の言葉から見よう。源氏は紫の上に、夕霧と落葉の宮に關する噂を語った末に、「こういふ話を聞くにつけても、私の死んだ後のあなたの上が心配だ」など意味ありげな笑みを含んで云う。この時点では、夕霧と落葉の宮との間には、深い関係は生じていない。噂だけが先行していたのだが、源氏はそうとは知らないで、柏木の死後、落葉の宮に起ったことは、紫の上の場合にも、十分起り得ることだと彼は危ぶむ。源氏は、夕霧が紫の上に近寄らないように、早くから警戒を怠らなかつた(螢野分)。夕霧は、偶然紫の上を垣間見た少年時代の一朝か

ら、美しい義母に思いを寄せ続けている。何時からとなく源氏はその恋心を察知していたと思われる。柏木さえ感付いた彼の思慕(若菜下)が、源氏の明敏な眼に映らない筈はあるまい。彼の脳裡には、紫の上と過した来し方の数数の忘れ難い思い出が去来し、将来、若い夕霧が彼女を得るさままでが、思い描かれたのであろう。心身に忍び寄る老いの影を感じ始めている(柏木)源氏には、病後一層あえかさを加えた紫の上(若菜下)は、妻というより恋の対象であった。神秘性をさえ感じさせるこの美しい人が、いつか他の男に奪われるのを怖れる、その不安な潜在心理を彼はふと漏らしてしまつたのではないだろうか。一方、これを聞いた紫の上は顔を赤める。「他の男に云い寄られるだろう」という夫の言葉が彼女の羞恥心を刺戟したのである。落葉の宮に起つた事件のようにと云うのが、生ま生ましい具体性を帯びているからであらう。彼女は返事をしない。心の中で「さまでおくらかしたまふべきにや」と思う。彼女は、源氏の突き放す様な言葉が、また、その含み笑いが、心に添わない。「あなたを守るために私は長生きをしよう」と云って欲しかったのである。源氏の言葉は紫の上の期待を二つの点で裏切つたと思われる。一つは、夫としての積極性に缺けていること。源氏は常々彼女にむかつて「私の志をわかしてもらいたい」と云つて来た。紫の上も、永年の間源氏ひとりにまごころを捧げ続けて来た。その二人の結びつきを、源氏は、一方が死ねばそれきりの崩れ易いものと考えているのだろうかという不満であつたと思われる。もう一つは、源氏に先立たれた場合に紫の上に誰かが云い寄るのを、しかたのな

いこととして彼が容認している点である。女の意志を無視して男が
 未亡人に接近し、強引に夫になりすます無法を、源氏が、致し方
 ない世のならいとして見許しているのを紫の上は見た。夫を喪った
 女が、夫の思い出を胸に抱いて、思うままに余生を送ることさえ許
 されないものであろうか。それが憂き世の現実だとしても、彼女は、
 源氏までがその現実を肯定しているのが情ないのである。

源氏に云われるまでもなく、源氏という後桶を失えば、自分は孤
 立無援の身となる外はない。彼女には、落葉の宮が無防備の状態
 で、男の好色が許されている世間に抛り出され、苦難と恥辱にさい
 なまれつつ、心ない風評の矢おもてに立たされている不幸を他人事
 と思えない。

紫の上は、かつて、夕霧が源氏に落葉の宮の印象について語るの
 を耳にして、その優雅で慎しみ深い人柄を知っていたと思われる
 (横色)。だから、世に取沙汰されている夕霧との情事について、原
 因が宮の側でないことが十分に推察出来、その困惑に心から同情を
 寄せることができたであろう。また女三の宮の出家に続いて、姉落
 葉の宮の芳ばしからぬ風評に心を痛めねばならない父朱雀院をも、
 気の毒に思わずに居られなかったであろう。彼女は夕霧の妻の雲井
 の雁にも同情をせずに居られなかった。夫の心を他の女に奪れる妻
 の苦惱は、紫の上自身も幾度か経験して来た。かつて源氏は紫の上
 を幸福な人と評して、

后といひ、ましてそれより次次は、やむごとなき人といへ
 ど、皆かならずやすからぬもの思ひ添ふわざなり。(中略) 親

の窓のうちながら過したまへるやうなる心やすきことはなし。
 そのかた、人にすぐれたりける宿世とはおぼし知るや。(若菜
 下)

と云ったが、実際の彼女の人生は、源氏の好色癖に悩まされる事件
 の連続であった。多妻制を当然と心得る夫にわかつてもらえない妻
 の苦しみを、これから独りで耐えなければならぬ雲井の雁も、紫
 の上には他人事ならずあわれであった。

夕霧が落葉の宮のもとに通っているという風評を聞いて、源氏
 も、宮と雲井の雁とを気の毒に思っている。そのあはれみは、紫の
 上の感じているあわれとは本質において全く異なる。源氏のそれはど
 んなに深いいたわりが籠っているにしても、所詮、男性側の、乃至
 は第三者の立場からの思いやりである。紫の上のは違ふ。当事者の
 立場、彼女自身をも含む被害者の立場で受け止めるなまなましい痛
 みの共感である。こういう場合、二云い寄った男性の罪は見逃され、
 被害者である筈の女性が世人から悪く云われなければならない。落
 葉の宮は、皇女という窮屈な身分柄まして世間からきびしい批判を
 受けなければならぬ。紫の上は宮をしみじみいたわしいと思つ。
 それにつけても、わが身をも含めて、女の身の上ほどあわれなもの
 はないと彼女は思う。

以前、月の美しい秋の一夜、落葉の宮は、一条の自邸で、夕霧に
 切に勧められて箏を少し弾き、続いて夕霧の琵琶に合奏して「想夫
 恋」の曲の終りの小部分を弾いた。後にその話を夕霧が語ると、源
 氏は

かの想夫恋の心はへは、げにいにしへの例にもしつべかりける折ながら、女は、人の心移るばかりのゆるよしをも、おぼろけにては漏らすまじうこそありけれ、と思ひ知らるることどもこそ多かれ

と評した(横笛)のを、紫の上は記憶に止めている。女が男心を引き寄せる程、風雅を解するさまを漏らしたのがもとで、身を過つに至った実例を沢山見たと云うのである。女性には男性の好色心を刺戟しないために、奥深く隠れているのが、常識的な身の持し方と一般に考えられていた。この度の事件も、落葉の宮が不用意に夕霧に隙を見せたのが発端だと、女の側が咎められるだろう。しかし、過ちは男の好き心から生じたのである。女性が興に乗じて風雅を楽しむことまで禁じられて、折節のあわれとも、無常の世の慰めとも無縁を装って、一生を空しく過してしまふのは、当人にとっては勿論のこと、娘の将来を楽しく、教養を身につけさせ、心を籠めて育て上げた親にとっても残念なことだ。夕霧を欲待して宮の琴を聞かせた母御息所にも落ちどほはない。男性の好色心を是認し、女性の側に凡ての責めを負わせるのは惨い。正邪を問えば、同情するべき気の毒な人は宮である。宮だけではない、女性一般であると紫の上はつづく思うのであった。

彼女は夫の好き心のために苦しい経験を重ねて来た。准太上天皇という高い身分になってからもその好色癖は止まない。光る源氏が准太上天皇の称号を賜ったので、六条の院は上皇御所に昇格した。同時に院内の女君達の生活圏は上皇の後宮となった。朱雀院は、そ

の後宮に、女三の宮を納れることを考えたのである。源氏は朱雀院の懇請に随って、女三の宮の後見を引受けた時点で、自身の後宮に、年若い皇女を加えることに興味を持ったのであった。後に

あまたつどへたまへるなかにも、この宮こそは、かたはなる思ひまじらず、人の御ありさまも、思ふに飽かぬところなくともしたまふべきを、かく思はざりしさまにて見たてまつること(略)(若菜下)

と述懐している。彼は藤壺の姪にあたるこの皇女に、伯母に似た美貌を期待していた(若菜上)。紫の上・花散里・明石・秋好・中宮(養女分のこの后にも彼はひそかに恋心を抱き続けていた)らが、既に中年に達してしまつた六条の院後宮に、年若く門地高き美姫が一人加わることに、好き心をかき立てられたのである。兄朱雀院の苦境に同情したのも偽りではないが、それ以上に、後宮に美姫をつとえる興が動機となつたのである。数年後の女樂の翌日源氏は紫の上に

この宮のかくわたりものしたまへるこそは、なま苦しかるべけれど、それにつけては、いとど加ふる心ざしのほどを、御みづからの上なれば、おぼし知らずやあらむ。(若菜下)

と語るが、それは女三の宮に欠点があることが発見された結果として、そつなつたので、宮の実体に気付くまでは、彼は若い内親王に、藤壺に近似した美貌・才気・気品を期待していたのであった。「伊勢物語」の主人公が、時間的にいわば縦の系列で次次に展開する好色の世界を、彼は壮麗な六条の院内で、同時的に横の系列で、更にはみやびやかに展開する。彼の場合も前者と同じく、色好むとは、色

情的性質のものではなく、女性達の様様な容姿と心情の、やさしさと美しさを見出し見届けたのしみてあった。優れた女性達が見せる、これまで誰も気付かなかった様な種類の身心の花に堪能することであつた。箏はかく奏するものという観念を一変してしまふ見事な音色、ふと口にする言葉の深い味わい、それらこそ彼の好き心を満足させるものであつた。だから、彼は困惑し切つて泣く紫の上の苦惱に思い至る前に、その身心の姿態美に心を奪われるのであつた。彼にとつて六条の院は彼の「好きの理想」を顕現する場であつたし、多くの美女、わけても紫の上は「好きの理想」を顕現する女性であつた。しかし、それは色好みの視座に立つた論理であつて、紫の上には理解できない。相互に一对一の関係で夫と愛し合うことが彼女の望みである。紫の上は少女期に、源氏の男手で教育せられる間に、伶俐明敏な資質と相俟つて、彼女は適確に物事を処理したり公正な立場で人間関係を裁定する能力を身に備へたのであろう。母・乳母・女房達に取り囲まれ、女の手で育てられた一般の貴族女性に、男性本位の社会に適合し易いように、慣習を尊重し習ひにさえ随順出来る様に馴致されて成長するのは異り、彼女は物、因事を根源的に思考し判断する能力を育てていた。源氏の須磨退去の際にも、その後の家政処理や育児の際にもその能力は有効であつた。しかし不合理な取り扱ひを忍ばねばならぬ時、その能力の故に彼女は一般女性に幾倍する苦惱を経験したことであらう。紫の上が久しい間正夫人の座を保つていた六条の院に、女三の宮が十三、四才という若さで興入れし、出自の数段高い正夫人として、寝殿の西面を領

有した。紫の上は悲しかったが、一言の不满をも漏らさなかつた。嫉妬心を見せることを、彼女の誇と美意識が許さなかつたのだろう。彼女は夫のためにいそいそと婚儀の準備を整え、宮の興入れの後には、しぶる夫を勧めて宮の許に送り出した。それが彼女にとって苦痛でない筈はない。しかし彼女はよく自制した。源氏にはかりでなく、自身の側近の女房達にも心の苦しみを悟られまいと努めた。彼女の存在を軽視して宮を六条の院に割り込ませた朱雀院に対しても謙虚に礼儀を尽した。紫の上はまた、院の内外に、二人の正夫人が仲睦じいと思わせるように努めた。源氏は彼女の心の屈折を察知することが出来ず、彼女の協力を天成の婦徳によるものと解して、彼女に対する愛と信頼を深めた。一方、彼女にとっては、二人の正夫人の仲で優位を保つことが「美」であつた。彼女は全力を傾けて優位の保全に努め、源氏の愛と信頼と相俟つて、六条の院内の彼女の地位は確固たるものであつた。しかし、その必死の努力の結果は窮極的には何であつたのか。時移つて、女三の宮の兄今上帝が即位すると、朱雀院と今上帝の、宮に注ぐ保護が急増し、源氏も宮を鄭重に取り扱わざるを得なくなつた。皇妹二品内親王という女三の宮に比べると、出自の低い紫の上は院内で従来の優位を保ち続ける見込みが立たなくなつた。彼女は出家を思い立つた。容貌は何年か先には必ず衰える時が来るに違ひない。源氏の愛を繋ぎ止めることは困難となるだろう。惨めな末路を曝すことは彼女にとつて最大の汚辱、最低の醜と考へられた。たまたま、女三の宮のために催された女楽の一夜、紫の上は、宮との身分差の隔絶を正目に見、源氏が宮

に奉仕する慇懃な態度を目撃し、明石にさえ劣るわが身の上を悟つた。明石は東宮の母女御の生母、皇子皇女の祖母として確実な地歩を占めているのだ。紫の上は再度出家を申し出るが、源氏は応じない。しかも依然として、彼女に夜離れの苦惱を味わせる。彼女は進退窮まって困惑の極に達するが、夫に逆らうまで自己を主張することをせず、遂に病に倒れた。それは死に繋がる重症であった。源氏の熱意によってやっと蘇生したが、長年月に亘る忍従が、彼女の心身をそこまで蝕んでいたのであった。本来進取的な闊達な人がらであるだけに、彼女には、自己抑制は人並み以上の心理的負担であった。彼女はよく耐え、窮極まで慎しみを貫き通した。それは、半面でまた、「女の慎しみ」の限界を見ることでもあった。彼女は自分がひたすら受身の立場に在って、正当な善悪の判断をさえ押し殺していた過誤に気付いたであろう。

源氏が話題にしている落葉の宮・雲井の雁・夕霧、それぞれの立場を、第三者の公正な視点から観ると、誰が誰に不当な押し付けをしているかは、明かに判別できる。今の場合、自己抑制が要求されて然るべきは、男性側であろう。女性が、正邪善悪の判断が出来るのにそれを抑えて、仏者が行として修する無言の行の様に、ひたすら忍従の教えを守っておし黙っているのは、不甲斐ないことだと紫の上は思う。紫の上の心語の語勢は亢っている。女楽の翌日の源氏との対話で絶頂に達した彼女の内部の傷手は、まだ癒えていないのである。柏木事件が起って、女三の宮が出家した結果、六条の院に二人の正夫人が存在するという不幸は解消してしまつた。しかし、

それは第三者の惹き起した偶発事による解消であつて、彼女の望んでいた夫婦間の根源的な問題の解決は、まだ果されていない。紫の上の望んでいる愛は、誠心誠意一人の夫と一人の妻の間に交流する男女の真情である。

源氏が考えている女の幸福は、多くの競争者の中で抽んでた優秀性によって、絶対的な優位を夫の心の中に占めることにあつた。女楽の翌日、彼が、これまで深いつながりをもつた女君達について紫の上にながながと語り聞かせたのは、彼が今、これまで知つた女性の誰よりも紫の上が優れているのを痛感していることを、彼女に告白したい心持が働いてのことであつたと思われる。源氏にとつて、女楽の一夜は、紫の上が、六条の院後宮の中で、優秀中の優秀、完璧といふべき女性であることを確信させた一夜であつた。彼はその翌日も、紫の上こそ、自分の高度の色好みの価値観を十分に満足させ得る、自分の希求して来た、至上の唯一女性であること、確め得た喜びに浸っていたのであつた。その喜びも、その愛も、紫の上には通じなかつた。彼の云う「こころざし」は彼女には信じられなくなつていた。彼女は源氏の言葉に隔絶感を覚えるのみであつた。二人の心は噛み合わなくなつた。

源氏は、紫の上の発病以来付き切りで熱心に看病する。夕霧の目にも、この人が失くなれば院は必ず出家するに違いないと映るほど、誠心から介抱する。しかし、理想とする愛の質の食い違いから、二人の心は相互に理解し得ない部分を残したままである。彼女は源氏を憎しと思つていのではない。愛が深いだけ恨みも深いのである。

小康を保つてはいるが、病身で神経が鋭くなっているので、紫の上の心語は勢が荒くなるのであろう。主張するべきことを主張し得ないで終る女の立場そのものが、もどかしいのである。彼女のこれまで一途に思い詰めて来た、激しい語気は、ここまで来てふと平静に戻る。どの辺まで自己抑制をするべきか。女の慎しみの美と両立する様な、自律的な身の持し方が出来たら理想的なのだが、實際問題として、具体的にそれはどうあることなのか。それが今後の女の課題だ。女が一生を有意義に、しかも無事に終るにはどうあればよいのか。もはや、自身の人生は多くを残さない。今は、養育をお引き受けしている、今上の女、一の宮の成長後の幸福を考へてのことだと思ふのであつた。紫の上の抱えていた課題——色好みの心法と女心とのくいちがいは、未解決のままであるが、彼女は解答を次代につことにして、一応の結着をつけた。俟

さて、冒頭に見た源氏の言葉は、われわれに、紫の上に抱き続けて来た夕霧の恋を連想させる。夕霧は、当時十五才であつた年の八月の野分の朝、はからずも紫の上を見てしまった。彼はその美しさに驚嘆し、自分を養母から隔てる父の真意に思い至つた。その夜は昼間垣間見た紫の上の姿が脳裡を離れず、翌日も心が落ち着かなかつた(野分)。その恋は夕霧の心の中では続いていてたであらうが、物語には現れて来なかつた。若菜の巻に至つて、再び作者は、夕霧の紫の上に対する思慕を述べ出した。若菜の上では、彼は、女三の宮と比較して、野分の日の紫の上の面影の気高さを忘れ難く思い、また

柏木に見られた宮を気の毒と思うにつけて、紫の上の深い用意を尊く思い比べるのであつた。若菜下に至つて、彼の恋は燃え出す。六条の院の寝殿で催された女楽に招じられた彼は、紫の上が席に列っているだらうと思ふので心が落着かない。

燈火の光で源氏が見る紫の上の美貌を作者は、

あたりにほひ満ちたるこちして、花といはば桜にたとへても、なほものよりすぐれたるけはひことにものしたまふと述べて、昔の野分の朝、夕霧が初めて彼女を垣間見て驚歎し恋心を抱いた時の記述と、よく似た表現を用いている。野分の巻の本文は次の通りである。

気高く清らに、さと匂ふこちして、春の曙の霞のまより面
白き樺桜の咲き乱れたるを見るこちす。あちきなく、見たて
まつるわが顔にも移り来るやうに愛敬は匂ひ散りて、またなく
珍らしき人の御さまなり。

作者はこの手法で、夕霧の脳裡を離れない女性の最初の印象と、現在さらに成熟美を加えた御簾の内の人の有様とをオーバー・ラップして描き出し、紫の上が夕霧の久しいあこがれの対象であることを、あらためて読者に思い出させようとしているのではないだろうか。それは、やがて彼の恋が物語の表面に浮上して来ることを暗示するものではないかと、われわれの想像を誘う。

大將はいと内ゆかしくおぼえたまふ。対の上の見しをりよりも、ねびまさりたまへらむありさまゆかしきに静心もなし。

夕霧は、自由に女君のいる御簾の中に入る源氏が羨しい。恋しい紫

の上が見たくて心が騒ぐ。野分の日から十年間、恋しい人を一度も彼は見ていないのである。

この御方をば、何ごとも思い及ぶべきかたなく、氣速くて、年ごろ過ぎぬれば、いかでか、ただおほかたに心寄せあるさまをも見えたてまつらむとばかりの、くちをしく嘆かしきなりけり。あながちにあるまじくおほけなき心などは、さらにものしりたまはず。いとよくもてをさめたまへり。

源氏が夕霧を警戒して、紫の上に近づけないので、彼は、一般的な好意を、義母に見て貰うだけという間柄以上には近づけないのを、歎かしく思っているが、この時点まではそれ以上の望みなどは持たないで、自制している。しかし、和琴にもこういう奏法があったのかと驚嘆するばかりの彼女の演奏を耳にし、更に、見事な箏を聞く、催しが終って帰途につく間も、彼は紫の上恋しさを募らせずには居られなくなる。

道すがら、箏の琴のかはりていみじかりつる音も、耳につきて恋しくおぼえたまふ。わが北の方は、故大宮の教へきこえたまひしかど、心にもしめたまはざりしほどに、別れてまつりたまひにしかば、ゆるるかにも弾き取りたまはで、男君の御前にては、恥ぢてさらに弾きたまはず、(中略)子どもあつたまひを暇なく次次したまへば、をかしきところもなくおぼゆ。夕霧の妻雲井の雁は、幼時祖母大宮から琴の手ほどきを受けたが、熱心に学習しなかつた上に、やがて父大臣の許に引き取られたので伝授を受けずじまいになった。それで不堪能を恥じて夫夕霧の前で

は弾かないことにして来た。今は、次次と生れた大勢の子女の面倒を見るのにかまけて、余事を顧る暇もなさそうに見える。夕霧は以前から風雅を欠く家庭生活があき足らなかつたが、妻に対する愛情は保っていた(若菜上)。しかし、彼の心には、今夜は異変が生じている。家路にむかう彼の心は重く、紫の上が、和琴から箏に取り換えて弾いた音色の見事さが、耳について離れない。これまで彼は、紫の上を女三の宮と比較して讃えていたのだが、今夜の彼は、妻を疎ましく思い、紫の上の面影のみを追想している。われわれは、ここまで急に進展した彼の恋心が、何ごともなくてすむか、氣懸りである。彼に、もし、紫の上の苦悩を知る機会が生じたら、彼女を自分の手で幸福にしたいという強い願望を持つに至ることは必定である。生真面目な男には思い返しが利くまい。その上、今の彼には父源氏はすでに絶対的權威でなくなっている。彼は父を批判出来る年齢に達している。危機は準備せられていたのだ。ところが女三の翌々晝、紫の上は突然発病した。源氏は心を尽して看病し、彼女を二条の院に移して、加持祈禱の限りを尽し回復を計る。彼女は一時絶息するが、全力を傾注した源氏の力で漸く一命だけは取りとめた。見舞に馳せつけた柏木は、夕霧の心痛のさまを見咎める。

まことにいたく泣きたまへるけしきなり。目も少し腫れたり。衛門の督、わがあやしき心ならひにや、この君のいとさしきも親しからぬ継母の御ことを、いたく心しめたまへるかな、と目をとどむ。(若菜下)

源氏―女三の宮―柏木の關係に並行して、源氏―紫の上―夕霧の線

が、対照的に構築されているのが、これで明らかになる。後者は不発に終る。紫の上の身の上を案じる夕霧の慕情の純真さ切なさは、柏木の恋情とは全く別物である。若菜下は、主要登場人物それぞれに、異常な運命の展開をもたらす、起伏に富んだ巻であるが、夕霧ひとりに限って云えば、彼の、義母紫の上に対する秘かな恋の、急激な浮上と、その内面的な進展とを、物語の表面に押し出した点に意味を持つ。しかも、その恋の清纯さは、一巻を蔽っている暗さ重苦しさの中の一脈の清流として、読者に救いを感じさせるものであった。

然るに、横笛を経て夕霧の巻に至ると、突然、彼の心は急旋回して、柏木の未亡人落葉の宮に傾く。こうして彼の紫の上に抱いていた恋心は、不発のままで一応の結着を見る。彼の恋に気付かなかつた紫の上は知らないが、落葉の宮事件が起らなかったら、危険は紫の上に起り得ることであつたのである。誤解を恐れずに云えば、夕霧の巻に見る落葉の宮の運命は、紫の上の身代りかも知れないのである。もしも、上掲の源氏の言葉がなかったら——つまり作者が教えてくれないなかったら、重大な伏線が若菜下に敷かれていたのをわれわれは危く見落してしまうところであつた。

溯って冒頭に掲げた本文(a)に書かれている源氏を見よう。源氏は、夕霧が落葉の宮に通うことを敢えて制止しないでおこうと心を決めている。平安時代には皇女が再婚した例は非常に僅少である。『皇胤招運録』に拠ると、桓武帝から一条帝に至る十七代の間、歴代の皇女中、改嫁者は、醍醐皇女の「普子内親王配三木源清平。後配和泉守俊連

留子内親王配大納言清藤井。河内守惟風等」の二例のみである。皇女は后妃に選ばれ

場合の外は、独身生活を送るのを本来とする。まして再嫁は異常であり、恥ずべきことと考えられていた。況んや、定められた儀礼を経ずに、非公認の形で男を通わずなどは不行跡の極、当人の恥辱だけでは済まされない背徳行為と見なされた。源氏には落葉の宮の苦境がよく理解できる。事實はどうであれ、一旦不行跡の噂が立つてしまえば、駟も及ばずである。その上に、今、若し、夕霧の訪問が絶えると、世間は今度は、宮が男に見捨てられたという噂を広めるに違いない。宮の傷口は一層深くなるばかりである。夕霧は、かつては、朱雀院が鐘愛の女三の宮の降嫁の対象として考えたくらいだから、内親王の夫として不適格者ではない。しかし歴とした北の方のある身、しかも、一世源氏准太上天皇の嫡子、大納言近衛大将ともある者が、分別もなく、密かに、未亡人となつた内親王と通じているというのは、噂だけとしても、当人は勿論、源氏にとつても不面目至極である。困つた事が起つたと源氏は思う。彼は以前、夕霧に、落葉の宮との交際は、生活上の世話に止めておく様にと注意したことがある(横笛)。しかし、事がここまで来てしまえば、咎め立てをするまいと彼は心を決めた。真面目人間の夕霧が、真剣に思いつめているのだから、一時の気まぐれや遊びではあるまい。これがわが子の宿世なのであろうと彼は思うのであつた。「宿世といふもの、のがれわびぬることなり。」と源氏が思い至るまでには、長い心の苦闘の歴史が彼にはある。彼は、正妻女三の宮の生んだ嬰兒を不義の子ではないかと疑い、見れば見る程柏木に似

ている子を、妻子として育てねばならぬ屈辱に悩み、わが生涯を通じて恐れている秘事、父帝の中宮との間に冷泉帝を生んだ罪の応報かとおののいた。しかし、そうではない。「宿世」のなせるわざなのだ。——それは実に長い煩悶の末、光と闇の間を幾度もくぐりぬけた末、やっと辿りついた明知であった。それでも

月日に添へて、この君のうつくしうゆゆしきまで生ひまさらたまふに、まことに、この憂き節皆おぼし忘れぬべし。この人の出でものしたまふべき契りにて、さる思ひのほかのこともあるにこそはありけぬ、のがれがたかなるわざぞかし。(横笛)

と薫は許せても、女三の宮は許し難く
過ぎにし罪ゆるしがたく、なほくちをしかりける。(同)

その尼姿となつてゐることさえ
みづからの御宿世も、なほ飽かぬこと多かり。あまたつどへたまへるなかにも、この宮こそは、かたはなる思ひまじらず、人の御ありさまも、思ふに飽かぬところなくともしたまふべきを、かく思はざりしさまにて見たてまつること、(同)

と、不快に思うのであったが、地獄の苦しみに近いかと思つ程の、精神的苦闘(柏下)を経た末に、漸く宮を許せるまでに自己をとり戻して、宮の持仏開眼供養に協力し、みづから千部経を書写し、よし、後の世にだに、かの花のなかのやどりに、隔てなくとを思はせ(鈴虫)

と云つて、短かかった俗世の縁を悲しみ、宮をいたわる。それからまた時が流れた。彼は、今では心の底から薫を慈しみ、女三の宮

をいたわることが出来る。男女の間のことは、人力の如何ともすることの出来ない前世からの決定である。自分が藤壺中宮に惹き寄せられたのも、薫が出生したのも、凡て宿世の力によるものである。人の罪ではない。従つて応報でもない。正邪を超えた運命である源氏は知つたのであった。その明知を以つて、夕霧の惹き起した事件を、彼は達観することが出来る。父としては、子の無法を咎め制するのが常識的な振舞であるが、今やすでに事が起つてしまつた時点で、立て前論を持ち出しても、事の眞の解決は望めない。源氏は、本質論に立脚して、当事者に対し、父たる自身の今後の方針を定めることにした。夕霧が一時の浮気心でなく、眞に宮を愛しているのなら、この際、自分是不介入の立場を守らうと。源氏が黙祝すれば、世論はやがて源氏に倣うであろう。源氏は自身の無明の闇を克服した間に、人の父としても、政治家としても、また、人間としても大成し得たのであった。なお、読者には、かくして、柏木事件の隠れた犠牲者たる落葉の宮に身の収まりが付き、柏木後日譚に大団円が到来することが予想されるであろう。

夕霧の巻には、この後に、小稿で取り上げた(a)条と(b)条とに引き続いて、源氏と夕霧との対面の場面が描かれている。

夕霧の来訪を迎えて、源氏は、彼が落葉の宮に対して抱いている心持を知らうとして、宮とその母御息所のことを話題に上す。夕霧は母御息所に関することは、はきはきと答えるが、宮については口をとぎしてしまふ。源氏は

かばかりのすくよけ心に思ひそめてむこと、いさめむにかな
はじ、用ゐざらむものからわれさかしに言出でむもあいなし、
とおぼして止めぬ。……(C)

夕霧の落葉の宮との情事に、父源氏は一切容嘴しないでおことうと決
意したという点で、物語の筋の進行上からは、先行する(a)条と、
全く一致重複する内容である。場面性のある(c)を活かして、(a)
は欠いてもよからう。また、夕霧の巻だけを独立した一巻として読
む場合は、紫の上を登場させたりする(b)条は、蛇足の感を抱かせ
るので、これも削った方がすっきりするかと思われる。しかし「源
氏物語」第二部全体を視野に入れると、先の(a)と(b)が不可
欠の重みを持つていることに気付かざるを得ない。それだけでなく、
上に見て来たように(a)(b)二条を解釈すると、夕霧の巻全体が、
源氏と紫の上とをはじめとして、六条院に生きる人人の生きざまが
くりひろげる物語を收拾する役割を荷なっていることに気付くか
らである。(b)条で対座している源氏と紫の上は、それぞれが、心の
内部深く経験して来た人間苦、人生苦を反芻しているのを見る。し
かし源氏は、柏木の子を養育して、正夫人所生の我が実子として世
間に送り出さねばならない現実を抱えてはいるが、すでに男女間の
間違いは「宿世といふものの、のがれわびぬることなり」という達
観を確立している。源氏―藤壺―冷泉院と、柏木―女三の宮―薫との
間の応報の疑念も断ち切れ、彼は心の平安を完全に回復し得ている。
話題に上る夕霧は、紫の上に寄せるあこがれを心の奥に折り畳ん
でいるにしても、今は当面の新しい恋に熱中している。

一方、紫の上は落葉の宮の悲運に同情を寄せ、女の身の上のあわ
れさに心を揺さぶられ、男社会の中で一方的に圧抑せられた、女性
側の、被害者の立場からの抗弁さえ許されない世の仕組みの、不当
さに怒りを抱く。しかし、自身の身については

わが心ながらもよきほどにはいかで保つべきぞとおぼしめぐ
らすも、今はただ一の宮の御ためなり。

という心境に居る。発病前の彼女の出家志望は、源氏に対する充た
されない愛の恨み、夫の心を信頼出来ない不安からの脱却を計った
ものであった。それは夫に寄せる執念と、云わば、同根のものであ
った。夕霧の巻に至って、爆発的な心語を経た後の、彼女の心境に
は、源氏から少し離れたところに精神の頼り所を持つ自立性の誕生
が感得出来る。彼女は生死の巻を往き来する間にさえ、源氏にひた
すら取り縋って生きた境地から、やっと離脱することをおぼえたの
であろう。五戒を授けられ仏法の教えに静かに心を傾ける間に、内
面的に深く沈潜する精神生活を開く素地がいつしか用意せられてい
たのである。彼女は、漸く、覚めた眼で自他を静観し、その中に
みずからを確立し得るまでに自己を育てた。源氏独得の女性観に
基く、一夫多妻を理想とする結婚観に対する彼女の違和意識は、
解消したのではないが、も早や、彼女の心には、夫に固執する気
持は失くなった。上掲の心語の最終の境地は御法の巻の初めに見え

みづからの御ころには、この世に飽かぬことなくうしろめ
たきはだしにまじらぬ御身なれば、あながちにかげとどめまは

